

白色の隕石

る起伏の原野を成形せり。沿道砂磧地多く耕地少く、住民稀少となり光景頓に一變するを覺ゆ。途上路右に約六尺立方許の白石の立つを見る。聞く該石は所謂隕石にして土人は其の石粉を取り以て酒に投ずれば甘味を生じ、酢に入るれば美味を添ゆと稱し、遠く來て之れが碎粉を持去る者多く、現に磨痕點々斑文を成すを見る。

二十五日氣溫稍々緩み、午前は五度午後は十四度を示せり。曉天朔風を冒して發す時恰も午前四時、壩河^{パホ}を渡る。河幅約八百米突、水幅僅に數米突、夫より大里堡、我八嘴を経て、雜木河を越ゆ。河幅數米突、平常、水なし。次て河東坡、安地を送り、大河驛を迎ふ。城壁ありて、内外人家八十有餘を有し、小學堂及巡警局を備ふ。斯て青石嶺馬兔壩^{チンシリンマトウバ}を過ぎ、大七河^{ヤンチヤパホ}に楊家壩河^{ヤンチヤパホ}（河幅共に五十米）^{（河幅共に五十米）}を渡り行程約十里、直に武威縣城^{ウエイシエン}即ち涼州^{リヤンチョウ}に入る。

涼州の狀況

涼州は所謂三十六國時代の梁國にて、人口約十萬、城壁を以て之れを繞らし、官衙には甘涼兵備道臺衙門、涼州府及武威縣衙門並に鎮臺、協臺等の武衙門を初め巡警局、郵政局、百貨局、土稅局等相備り、教育には高等小學堂一、民蒙學堂二、其の他城外に